

楞嚴呪と白傘蓋陀羅尼

—— 還元サンスクリット本の比較研究 ——

木村俊彦

凡例

1. 旧字体のうち新字体に直せるものは直す上、特に固有名詞に於て異字体を残す場合がある。
1. サンスクリット文を和文に交えた場合は、植字の都合上フランス文字も使用した。
1. 一部は他誌に発表したものもあるが、今般改めて総合的に考察し直した。
1. テーマの呪・経名は、特に書誌情報で必要とするほかは括弧記号を省いた。

〔はじめに〕

禅三宗で依用している呪・経では金剛般若経と共に長いものに属する楞嚴呪は、もと『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経』(大正新脩大藏経第945)の巻第七に述べられていた。この経名は、唐末・五代の雲門文偃が挙げたのが最初の登場であるが、但しその中で彼の先蹤である乾峯の語も引用している。

「挙。雪峯云、尽大地是爾將謂別更有。師云、不見楞嚴経云、衆生顛倒迷己逐物、若能転物即同如来。」(大正藏経第1988、『雲門匡真禅師広録』558頁)(挙す。雪峯云く、尽大地は是れ爾じ將に謂うべし、別に更に有りや、と。師〔雲門〕云く、見ずや、楞嚴経に云く、衆生顛倒して己に迷うて物を逐う、若し能く物を転ずれば即ち如来と同じ、と。)但し経文は次の如し。「一切衆生從無始來迷己為物。(中略)若能転物則同如来。」(同経巻第二)(一切衆生、無始より来のかた、己に迷うて物を為す。(中略)若し能く物を転ずれば則ち如来と同じ。)この後「心身円明、不動道場」といった言句が続き、「適來」といった唐言もこの経は使って、唐代に制作された擬経であることが理解される。それだけに陀羅尼とは別に

(1)

雲門などに訴えるものがあつたのであろう。経の上掲の後句は『葛藤集』第213則に採り上げられている（梶谷宗忍訳註『宗門葛藤集』、「楞嚴転物」）。

また洞山の嗣・乾峯に僧が楞嚴経を挙げた因縁を雲門が述べている。「挙。僧問乾峯、十方薄伽梵一路涅槃門。未審路頭在什麼處。峯以拄杖劃云在者裏。師拈起扇子云、扇子勃超上三十三天、築著帝釈鼻孔、……」(555頁)即ち「乾峯に問う。十方の薄伽梵、一路涅槃の門。未審し、路頭什麼處に在りやと。峯、拄杖を以つて劃して云く、者裏に在り、と。師〔雲門〕、扇子を拈起して云く、扇子勃超して三十三天に上り、帝釈の鼻孔に築著す」云々というもので、楞嚴経巻第五の世尊の偈の最終行が下線部である。無門慧開が『無門関』第48則でこの話を載せ、『葛藤集』第146則もそうである(同「乾峯一路」)。愚堂国師が「再住正法山妙心禅寺語」の上堂語の提綱で使っておられる(木村編『訓読本愚堂録・愚堂年譜』十五頁)。この他雑則で楞嚴経が幾度か使われる様であるが、不空の後、唐末までに編纂されたのであろう。尚、楞嚴経に註釈した覚範慧洪は、南宋の始め頃に不遇の中でそれらを著わしたらしい。

この頃は禅家に注目されなかつた巻第七の神呪が、南宋末の楞嚴会を経て、元代末期には『勅集百丈清規』で「楞嚴呪」として、大悲呪と共に依用陀羅尼になり、儀式主義の中に取り込まれた。経全体のプロットが、仏弟子・阿難に戒体を保持して修行を全からしめんと指導する釈迦の説法を中心としており、巻七の呪はその為阿難に教えたものとしており、もと「楞嚴会」として四月十三日の入制の儀式に楞嚴行道と共に使つたのである。既に夢窓疎石が、宋末元初の鎌倉禅界にあって建長寺の楞嚴会の維那役(楞嚴頭=れんねんじゅう)を勤めたという(玉村竹二『夢窓国師』)。楞嚴会自体既に鎌倉禅界によって行われていたのである。元代末期の『勅集百丈清規』では、楞嚴会に関わらずあらゆる儀式に楞嚴呪を指定しており、経典は指定していない。他に大悲呪と無量寿呪が時に加わる。

(2)

しかしこの「神呪」は、不空が音訳した「大仏頂如来放光悉怛多鉢怛羅陀羅尼」と同種で、勿論密教系統の単行陀羅尼である。空海将来の悉曇版が大正藏經第944BとしてAの不空訳と共に収録されている(いずれも江戸時代の真言僧・淨嚴の書写である)。同種であるが、原本は密教本と經卷本で少しく異にし、われわれは密教本を「唐本」と呼び、經の卷第七所収のものを「宋本」と呼ぶ。また楞嚴会を通してわが国禪界に唱えられている楞嚴呪を「元本」と呼ぶが、大正藏經第945經の卷第七の末尾にはこの元本が唐突に付されている。全439句から427句に減っている。原本が違うことから訳者も異なり、「般刺蜜帝」が実在したなら宋本の音訳者パーラミトラである。

所がインド密教に目を転ずると、これらは「抄本」であって、更に「如是我聞」云々の序分の付いた「広本」が存在した。ネパール写本の中でB. H. ホジソンが蒐集したものにそれがあって、ロンドンの王立アジア協会に保存されており、筆者はそこで二度に涉って二種を撮影させて頂いた。これは金倉圓照博士が雑誌『文化』第2巻1号(昭和10年)に「陀羅尼一滴」と題して、ルドルフ・ハーンリが東トルキスタンの現地語写本の研究にこのネパール写本を参照したと伝えているのを、『インド哲学仏教学研究』(昭和48年)に補正収録された論文で私が知ったことか機縁になっている。

ハーンリは1911年の『王立アジア協会誌』において「東トルキスタンの未知語Ⅱ」を発表した中で、A. スタイン蒐集の卷子本の中からこの陀羅尼を選び、初頭の部分のみホジソン蒐集のネパール写本と比較したのである。金倉博士はそれを更に大藏經中の上記漢音訳と比較した。所がネパール写本(後に記す目録第77)の方は広本で、卷子本の方は抄本であった。ハーンリはその旨、註記している(*Journal of the Royal Asiatic Society*, 1911, p.462, fn.6)。コータン訛りの陀羅尼については田久保周誉『敦煌出土于闐語秘密經典集の研究』(昭和50年)が扱っている。

インド密教を反映しているチベットの陀羅尼訳は、広本二種と抄本四種がチベット大藏經に入っている。即ち『東北帝国大学蔵

版西蔵大蔵經總目錄』(昭和9年)の第590と第985が広本であり、第591、592、593、986が抄本である。筆者はネパール本がインド原本に最も近いと見て、下記のカatalogから第61を平成10年に、翌年に第77を手持ちの旧ペンタックスで、室内光で撮影させて頂いた。従って撮影状態はあまり良くない。非公開を条件に許可を下さった図書館長Michael J. Pollock氏に深甚の謝意を述べた次第である。(解説成果は『文化』第65巻1・2号所収「王立アジア協会所蔵白傘蓋陀羅尼写本の研究」として贈呈済み。但し第一会のみ。)

楞嚴呪の還元梵文はかつて『正法輪』第28巻11・12号から第31巻10号に涉って発表したもので、全5会(全5章)の全貌はほぼそれで察しが付くが、原本の研究が望まれていた。今漸くそれが可能になったが、その場合、発表は第一会に限った。紙幅の関係もあるが、後4会が極めて密教的な祈禱句になっているのに対して、第一会は全体の五分の二を占めつつ、インド古来の婆羅門教の祈禱形式を踏まえ、私の往年の研究「ルドラ・ガーヤトリーの生成と展開 ——婆羅門教からシヴァ教へ——」(『文化』第34巻3号)の関連研究ともなり、インド学的だからだ。

そこで今回は広本の典型たるホジソン蒐集本第61の第1章を、ネパール訛りを排除した正しいサンスクリット語に戻したものと和訳でここに提示すると共に、抄本の原句である悉曇本(唐本)を、正しいサンスクリット語に補正した上で、和訳と共に開示し、その成果で現楞嚴呪(元本)の第一会のサンスクリット語還元と和訳を結論的に示したい。楞嚴經中の宋本はその過程で比較したい。呪句は第一章が始めに作られ、年代が下がって密教的な展開の中で後4章が作られた。その作成年代は、第一章が紀元6世紀後半、後4章が7世紀前半と言える。グルマキールティ(550-620頃)がふれる所の草創期密教に第一章が比定できる上、後4章は初期密教的になっているからである。それは抄本についてであって、広本は更に遅れて整えられたものであろう。般若心経もインド伝来のものは玄奘訳と同じ抄本で、広本は悉曇版で真言宗寺院に伝えられている。こちらはいずれもF.マックスミュラーがオックスフ

オードから研究を出版した(*Anecdota Oxoniensia*, 1881)。

カタログ第77は第61を更に増大させたもので、写本も黒色の紙に金泥と銀泥を交互に使って、紺紙金泥の平家納経と似ている。そして装飾的なだけに解読しにくい。ハーンリがこちらを参照本に選んだのは、言語がよりサンスクリット語に近いからであろう。第61は黄色の紙(虫食い除けの塗料のせいである)に黒色の文字(ランジャー体)を載せて、第77より読み易い。しかしそのネパール訛りはひどいもので、チベット訳や各抄本を参照して解読(還梵)が可能になった。従って広本は第61を解読した。尚楞嚴呪の後4会は木村・竹中『禅宗の陀羅尼』(大東出版社)の第1篇を参照されたい。

サンスクリット本はすべて還元したものであるから、副題の如くになった。この種の祈祷句集は変異がひどく、チベット語版大藏経所収のものに全同なものはない。例えば星宿にも祈るが、その星宿数はチベット訳第590にあって写本第61にはない。しかし両者は最もよく対応している。尚、王立アジア協会所蔵のホジソン蒐集ネパール写本は、篤学のネパール民俗研究家ホジソン(Brian H. Hodgson, 1800-1897)が、一度壮年時に「仏教理解の一助の為に」(館長宛書簡)寄贈したもので、その前に見本として十万頌般若経を贈っているが、これはカタログに載っていない。これは叙事詩『マハーバーラタ』と同分量になるが、東大図書館所蔵の河口慧海蒐集本で見ると、実際は半分ほどである。多分叙事詩に対抗する為にそのようにうたったのであろう。ホジソンは64歳でイギリスに帰国して、写本と研究ノート類の一切を大英博物館に寄贈した。それらは今、先に独立した大英図書館(the British Library)に一括保存され、目録ができています。そこには仏頂尊勝陀羅尼が二種あった。しかしそこではコピーを許されず、閲読のみ許可されるので、研究が困難だ。王立アジア協会所蔵の写本のカタログについては、1875年に二人の著名なインド学者の手で下記の如く作成され、その雑誌に掲載された。われわれはそれに依っている。*"Catalog of Buddhist Sanskrit Manuscripts in the Possession*

of the Royal Asiatic Society”, edited by E.B.Cowell and J.Eggeling (Journal of the Royal Asiatic Society for 1875). ここにおいて第61写本は次のように、奥書きからのタイトルが記されている。“Āryasarvatathāgatoshñisha-sitātapatrā nāmāparājītā mahāpratyaṅgirā nāma dhāraṇī mahāvīdyārājī”. 17世紀の書写とする。

この頃ネパール族は金剛乘(バジュラヤーン)的な土俗密教を中心に仏教を信仰、葬式に際して供養の写経をすることが習わしになっていたから、多くのネパール写本が得られるのである。しかしそれらはチベットに保存されていたインド写本よりは質が落ちるので、研究者の苦勞する所である。このタイトルは次の様に訳す。「聖一切仏頂白傘蓋と名づくる不敗大反呪詛という陀羅尼・大明呪女王」。広本の「大明呪女王」が抄本にはない。陀羅尼自体を女性形“dhāraṇī”の故に女尊として崇め、ネパール密教的になっている。宗門では楞嚴呪の最後で鈴を打つ八句「エン・オノリ・ビシャチ・ピラホジャラトリー・ホドホドニー・ホジャラホニハン・クキツリョヨーハン・ソモコー」を「白傘蓋陀羅尼」と呼ぶこともあるが、誤まっている。続いて広本第一章の還元梵文と和訳を載せる。

[王立アジア協会蔵写本第61の還元梵文]

凡例

1、紙の表裏に書かれているので、表を「a」とし、裏を「b」と表わす。数字は丁数と行数である。約28×8センチの黄色い紙面に5行、1行に45字平均がランジャー体(後期グプタ文字を更にネパール風に改変した装飾的な字体)で丁寧に書かれている。続いて和訳を掲げる。室内光の故に影を避けて斜めから撮影したので、焦点がぼやけて、あまり良い状態のプリントではない。今のペンタックスMZ-Mはストロボに際して露光を自動調節するので、真正面から撮影できるが、旧タイプではストロボ接写に自信がなかった。

最も問題なのはひどいネパール訛りを匡す方法である。それは抄本の該当する部分およびチベット語訳・デルゲ版東北帝大目録

第590との照合にも依るが、最終的には筆者のインド学的能力自身が頼りになる。祈禱句のテキストは各本で少しづつ違ってくるので、写本のテキスト・クリティークは他本をあてにできないからである。かくて補正した結果のみを表示することになり、そのいちいちの過程は煩雑を恐れて記さない。

(1b,1) om̐ namo bhagavatyā āryamahāpratyāṅgirāyai / evam mayā śrutam / ekasmin samaye bhagavān deveṣu trayatṛiṃśatsu vihara (1b,2) ti sma / sudharmāyāṃ devasabhāyāṃ mahatā bhikṣusaṅghena sārddham mahatā ca bodhisattvasaṅghena devānāṃ ca indreṇa sā (1b,3) rdham / tatra khalu bhagavān prajñapta evāsane niśadya / uṣṇīṣavyavalokitaṃ nāma samādhiṃ samāpannaḥ / samanantara-samāpannasya bhagava (1b,4) ta uṣṇīṣamadhyād imāni mantrapadāni niścaranti sma //

om̐ namo bhagavatyā uṣṇīṣāyai / śuddhavirahavimala svāhā / om̐ na (1b,5) mo bhagavatyā uṣṇīṣāyai / namo buddhāya namo dharmāya namaḥ saṅghāya / om̐ namaḥ saptānāṃ saṃyaksambuddhakoṭinām / (2a,1) namo maitreyapramukhānām bodhisattvānām mahāsattvānām / om̐ namaḥ saśrāvakaśaṅghānām / om̐ (2a,2) namo loke 'rhatām / om̐ namo srotāpannānām / om̐ namaḥ sakṛdāgāminām / om̐ namo loke saṃyaggatā (2a,3) nām / om̐ namaḥ saṃyakpratipannānām / om̐ namo devarṣinām / om̐ namaḥ śāpāyurdevānām / (2a,4) om̐ namaḥ śāpānu-grahasamarthānām / om̐ namaḥ sarvavidyādharaṇām / om̐ namo devabrahmaṇebhyaḥ / om̐ nama indrāya / om̐ namo (2a,5) bhagavate rudrāya umāpatisahitāya / om̐ namo varuṇāya sarvanāgādhipataye / om̐ namo bhagavate nārāyaṇāya /

mahā (2b,1) pañcamudrān namaskṛtya / om̐ namo bhagavate mahānandikeśvarāya mahākālāya / namas tripuraṇagaravidrāvaṇa- (2b,2) karāya / om̐ atimuktikaśmaśānanivāsine mātṛgaṇavan-ditasahitāya / om̐ namo (2b,3) bhagavate tathāgatakulāya / om̐ namo bhagavate padmakulāya / om̐ namo bhagavate vajrakulāya / om̐ namo

bhagavate (2b,4) maṇikulāya / oṃ namo bhagavate gajakulāya /
oṃ namo bhagavate ratnakulāya (2b,5) oṃ namo bhagavate nāgakulāya/
oṃ namo bhagavate kumārakulāya / oṃ namo bhagavate (3a,1) 'rhate
saṃyaksambuddhāya / oṃ namo bhagavate samantabhadrāya tathāgatāyā-
rhate saṃyaksambuddhāya / oṃ namo bhagavate ratnaketu- (3a,2)
rājāya tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / oṃ namo bhagavate
vairocanarājāya tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / oṃ na (3a,3)
mo bhagavate vikasitakamalātyantagandhakatararājāyārhatē
saṃyaksambuddhāya /

etebhyo namaskṛtya / bhagavatīm (3a,4) sarvatathāgatoṣṇīṣa-
sitāpatrām nāmāparājītām pratyaṅgirām pravakṣyāmi / sarva-
kalahavādavigrahām praśamāmi / sarva (3a,5) bhūtagraha-
nigrahakarāṇi / sarvaparavidyāchedanī / akālamṛtyuparitrāyaṅkarī /
sarvasattvabandhanamokṣaṇi / sarvaduṣṭaduḥsvapna (3b,1) nāśanī /
sarvaheyanigadabhañjanī / yakṣarākṣasagrahāṇām vidhvamsanakarī /
ghoraduṣṭasvapnānām nāśanī / viśāstraṅgyudakottārakarī / sarva-
(3b,2) durgatibhayāt tāraṇi / aṣṭahato 'pi akālamaraṇaparitrāyaṅkarī /
aparājītā mahādḥarā mahātejā mahāśvetajvalā mahādīptā ma (3b,3)
hābalā mahāghorā mahāmalā mahāpāṇḍuravāsini / āryatārā / bhrūkuṭi
caiva vijayā nāma viśrutā dharmakā / vajrajihvā ca / viśālā (3b,4) caivā-
parājītā / vajratuṇḍī / viśālākṣī / śāntavidehapūjitā / saumyarūpā /
mahāśvetā / mahābalapāṇḍuravāsini / āryatārā ma (3b,5) hābalā /
amalavajraśṅgalā caiva / kumārī kūrmatā / vajrahastā mahāvidyā-
kāncanamālikā kusumbaprabhāvati / vairoca (4a,1) nā caiva tathāgata-
kuloṣṇīṣāḥ / viśrutā ca vidyāmālikā / vajrakanakaprabhā
locanavajratuṇḍī ca śvetā ca kanakaprabhā / śrību (4a,2)
ddharājñimātā / tathā vajradhāraṇi ca vajramālā mahāmālyā / daṇḍi ca
kanakaprabhā / vairocanā ca śvetā ca kamalākṣā / vinītaśā (4a,3)
ntacittā ca śāśiprabhā / ātmaguṇajñānīprabhā / ityete mudrāgaṇāḥ
sarvarakṣāṃ kurvantu mama sarvasattvānāmś ca tathā sarvabuddha
(4a,4) bodhisattvamahāsattvā mameṣṭārthasiddhiṃ dāyantu
(8) sarvārthasiddhiṃ ca dāyantu //

〔広本第一章和訳〕

オーム。聖・大反呪詛女尊に礼拝す。このように私は聞けり。或る時世尊は三十三天に住していませり。善法なる神々の会において、大比丘僧伽と大菩薩僧伽と共であり、又神々の中の神・インドラと共なりき。そこにてげに世尊は、しつらえられし座に坐し、仏頂観と名付くる三昧に入れり。直に入られし世尊の仏頂の中より、これらの真言が吐露されしとぞ。

オーム。仏頂女尊に礼拝す。清浄・離欲(viraha→virāgaか。チベット音訳:bi-ra-dsa)・無垢なるものよ、スヴァーハー。オーム。仏陀に礼拝す。教法に礼拝す。僧伽に礼拝す。オーム。七千万の正等覚に礼拝す。弥勒を上首とする菩薩摩訶薩に礼拝す。オーム。声聞僧伽を伴えるすべての仏と菩薩摩訶薩に礼拝す。オーム。世の阿羅漢に礼拝す。預流果(の聖者)に礼拝す。一來果(の聖者)に礼拝す。不還果(の聖者)に礼拝す。オーム。世の正來(の聖者ら)に礼拝す。正しく(聖者の果報に)向かいし者らに礼拝す。オーム。神仙らに礼拝す。オーム。成就の明呪を持する聖仙らに礼拝す。オーム。呪詛の生命ある神々に礼拝す。オーム。呪詛で利益を与え得る(神々)に礼拝す。オーム。一切の明呪を持する(聖仙ら)に礼拝す。オーム。神なる梵天らに礼拝す。オーム。インドラに礼拝す。ウマーパティと共なるルドラ尊に礼拝す。オーム。全ナーガ族の主たるヴァルナに礼拝す。オーム。那羅延天に礼拝す。

五大印に礼拝してから、オーム。大歓喜自在なる大黒(マハーカラ=シヴァ)尊に礼拝す。(悪魔の現わした)三城市を破壊する(シヴァ神)に礼拝す。オーム。完全解脱し墓地に住む(シヴァ神)に(礼拝す)。オーム。聖母衆に敬愛されたる者(ドゥルガー神妃)を伴える(シヴァ)に(礼拝す)。オーム。如来部尊に礼拝す。オーム。蓮花部尊に礼拝す。オーム。金剛部尊に礼拝す。オーム。摩尼部尊に礼拝す。オーム。象部尊に礼拝す。オーム。業部尊に礼拝す。オーム。宝部尊に礼拝す。オーム。竜部尊に礼拝す。オーム。童子部尊に礼拝す。オーム。世尊・阿羅漢・正等覚に礼拝す。オーム。普賢如来・阿羅漢・正等覚尊に礼拝す。オーム。

(9)

宝幢王如来・阿羅漢・正等覺尊に礼拝す。オーム。毘盧舍那如来・阿羅漢・正等覺尊に礼拝す。オーム。開敷花究竟良香王(如来)・阿羅漢・正等覺尊に礼拝す。

これらに礼拝してから、聖一切如来仏頂白傘蓋と名付くる不敗反呪詛(大明呪女王)を唱えよう。一切の騒動・論争・諍いを鎮めん。(この不敗反呪詛陀羅尼は)一切の鬼霊・邪魔を圧伏するものなり。一切の他明呪を絶つものなり。時ならぬ死から守るものなり。一切有情の繫縛を解き放つものなり。一切の悪い悪夢を絶つものなり。一切の捨てるべき鉄鎖を断ずるものなり。夜叉・羅刹・邪魔を滅ぼすものなり。恐ろしい悪夢を滅ぼすものなり。毒・武器・火・水から守るものなり。一切の悪趣の恐怖から守るものなり。八回殺されても不時の死から保護するものなり。

不敗の大雲女尊、大威力女尊、大白焰女尊、大炎女尊、大力女尊、大怖畏女尊、大不垢女尊、大白衣女尊、聖ターラー、そして有名な勝洪面女尊、道德的女尊、且つ金剛舌女尊、また最勝不敗女尊、金剛面女尊、最勝眼女尊、寂靜靈に祀られたる女尊、好相好女尊、大白女尊、大力白衣女尊、聖ターラー、大力女尊、また無垢金剛愛女尊、童女尊、亀に乗ってきた女尊、金剛手女尊、大明呪金鬘女尊、黄金の輝きを持つ女尊、また太陽女尊、如来部仏頂女尊、有名な明呪鬘女尊、金剛金光女尊、また光金剛面女尊、白い金光女尊、勝仏王妃母尊、また同様金剛持女尊、金剛鬘女尊、大鬘女尊、婦警女尊、金光女尊、また太陽女尊、白女尊、蓮眼女尊、調護寂靜心意女尊、我徳識知光女尊、以上これらの聖母衆と共に印契眷属は、わが一切の安寧をもたらし給え。かつ一切衆生の安寧を、同様に一切の仏・菩薩摩訶薩衆がもたらし給え。またわが願いの成就を与え、一切利益の成就を与え給え。(第一章了)

[考察]

ここの祈祷は大きく分けて二分できる、初めは“om namas”の間投詞で始まり、対象の神仏は第4格(与格)で表わす。この形式は『ヤジュールヴェータ』の葬送儀礼(アグニチャヤナ祭壇構築式)の中

で詠まれるもので、バラモン教の伝統を踏まえ、仏教祈禱句にも多く取り入れられた。まずバラモン教の神々に祈っているが、本山や塔頭でも洛中諸神祇に「松尾大明神、平野大明神」と回向で呼びかけている。仏殿の壁際にある神像はそういった神々である。

ここでの注目は、勿論抄本にない序分(序文)である。実は楞嚴經の卷第七に、次の様な「ト書き」がある。「爾時世尊從肉髻中湧百宝光、……聽仏無見頂相放光如來宣說神呪。」しかしこれは写本には根拠がない。「一名中印度那蘭陀曼陀羅灌頂金剛大道場神呪」として次に紹介しているので、八世紀の密教兼学のナーランダー学院から伝わったものかも知れない。最初に陀羅尼を神格化した女尊に祈っているが、これはネパールで書写した人の筆であろう。このような帰敬偈は写本によくある。そして本体は仏頂(tathāgato-shñiṣah) 尊崇拝の枠内であることを示している。

「白傘蓋陀羅尼」(Sitātapatrā dhāraṇī)がこの陀羅尼の固有名詞である。白い(sita-)日傘は強い日光を遮ぎって人々を保護する(ātaṣa-tram)様に、この陀羅尼は人々に安寧をもたらすものと言う事を中段で述べている。後段は、星出身の有名な密教的女神ターラーなどに安寧と利益を求めらるいわば回向の部分である。楞嚴經のプロットとは異なるものである。そこで諷經にあたる前半が最初にできたものである事が分るが、仏・菩薩や仏教的聖者に祈った後、ヒンドゥー教的の神・女神にも祈る。5如来などは第77の広本では実に14如来に拡大している。

広本は抄本のおよそ五割ほど拡大している。抄本の典型である悉曇本(大正新脩大藏經第944B)の文字は、北インドのシャラダー体から出て、「成就したもの」(siddham)という意味で呼ばれるが、中国で縦書きに改められ、変改も受けているので、やはり還元梵文が必要である。大悲呪などもその形で伝わっている。

広本を用意したネパールの民俗と歴史について述べる。この年号はネワール王朝が始まった西暦880年を紀元とするので、写本に書いてある書写年代に880を足すと西暦になる(エッケリングと

コウエルのカタログ序文)。多くはグルカ王朝後の17世紀に書写したものが残っているが、大谷光瑞が蒐集したもの(最近、龍谷大学がCD-ROM版で出し、筆者も贈呈を受けた)や、河口慧海蒐集本(高楠順次郎蒐集のものと一緒に東大図書館が所有している)のほか、シルヴァン・レヴィやド・ラ・ヴァレー・プーサンなど著名な仏教学者が独自に調査して、貴重な梵本編集を行ってきた。これがヨーロッパ仏教学の事始めであった。いまではカトマンズに国立古文書館(ナショナル・アルヒーヴ)に多くの写本を集め、主としてドイツのインド学者が利用研究している。

所で筆者のランジャー体学習は基礎的にはホジソンの著書に依り、ホジソンの伝記についても、同じく下記の出版を入手した事でそれが可能になった。それは字母だけの一覧表だったので、それ以上に多く使われる合成字(インド系文字は音節中心に表字するので、文章と係わりなく母音中心に合成する)についてはサンスクリット語のデーヴァナーガリー体から推すわけである。ホジソンの行伝や書簡なども付した書は、Brian H. Hodgson, *Essays on the Languages, Literature and Religion of Nepal and Tibet* (Amsterdam 1972)で、著者自身は74歳の時にロンドンから出版したらしい。また宗教学の方面から実地にネパールを調査したものに、高橋涉「アランニャの経典的概念とその形態」(『宮城学院女子大学研究論文集』83号)(1996)と同「ネパールのインドラ祭とその社会機能」(『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』第2号)(2001)がある。日本宗教学会でも高橋氏は、土俗密教派バジュラヤーンについての報告をしていて、参考になった。現在のネパールは立憲君主制のもと、ヒンドゥー教系と仏教諸派の共存が続いている。筆者がカトマンズからルンミニーまで雇ったタクシーの運転手も、「自分はサキヤと言い、仏教徒だから心配要らない」と言っていた。

〔悉曇版白傘蓋陀羅尼と楞嚴呪の梵本〕

次に抄本の梵本の典型として悉曇版の還元梵文を挙げ、次いで楞嚴呪の還元梵文を挙げる。和訳はまだ未提示だった悉曇版の方

を付し、楞嚴呪との違いを見る。表題の“Tathāgatoshñisha-sitātapatrā dhāraṇī”は悉曇版の始めにあるものだが、原本では表題は前に付けない。これは中国的改変である。“Ryōgonshu Mantraḥ”も仮題である。また大藏経第944Bの「大仏頂大陀羅尼」は全くの仮題である。両本を比較できる様に並べたので、唐本と元本の構成の違いが容易に看取されよう。

Tathāgatoṣṇīṣa-sitātapatrā-dhāraṇī

namaḥ sarvabuddhabodhisattvebhyaḥ/ namaḥ saptānām saṃyaksambuddhakoṭīnām saśrāvakasāṅghānām / namo loke 'rhatām / namaḥ srotāpannānām / namaḥ sakṛdāgāminām / namo 'nāgāminām / namo loke saṃyaggatānām saṃyakpratipannānām / namo ratnatrayāya /
 namo bhagavate dṛḍhaśūrasenapraharaṇarājāya tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate 'mitābhāya tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate 'kṣobhyāya tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate bhaisajyaguruvoidūryaprabhārājāya tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate sampra(kusumi)taśāleन्द्रarājāya tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate śākyamunaye tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate ratna (kusuma) keturājāya tathāgatāyārhatē saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate padmakulāya namo bhagavate vajrakulāya namo bhagavate maṇīkulāya /
 namo bhagavate gajakulāya / namo devarṣīṇām namo siddhividyaḍharāṇām namo siddhividyaḍhararṣimām śāpānugrahasamarthānām / namo brahmaṇe nama indrāya namo bhagavate rudrāya umāpatisahitāya namo nārāyaṇāya rakṣasahāyāya /
 pañcamahāmudrān namaskṛtya namo mahākālāya tripuraṇagara-vikṣepaṇakārāyātimuktikaśmaśānavāsine mātṛgaṇanamaskṛtāya / ebhyo namaskṛtya /
 iyam bhagavatī tathāgatoṣṇīṣasitātapatrā nāmāparājitā pratyāṅgirā sarvadevanamaskṛtā sarvadevebhiḥ pūjitā sarvadevebhiḥ paripūjitā sarvabhūtagrahanigrahaḥkarī

paravidyāchedanakarī durgatānām sattvānām damakam (karī) /
 duṣṭānām nivāraṇī / akālamṛtyupraśamanakarī /
 sarvabandhanamokṣaṇakarī / sarvaduṣṭaduḥsvapnanivāraṇī /
 caturaśītīnām grahasaḥsrāṇām vidhvaṃsanakarī / aṣṭāvīmśatīnām
 nakṣatrāṇām prasāadhanakarī / aṣṭāṇām mahāgrahāṇām vidhvaṃs-
 anakarī / sarvaśastranivāraṇī / ghoraduṣṭasvapnānām ca nāśanī /
 viśaśastrāṅnyudakarakṣaṇī / aparājitā ghorā mahābalā mahādīptā
 mahātejā mahāśvetajvālā mahābalapāṇḍuravāsini / āryatārā /
 bhurūktī caiva / vajramālā viśrutā padmakā vajrajihvā ca / mālā
 caivāparājitā vajradaṇḍī viśālā ca / śāntavidehapūjitā mahāśvetā
 āryatārā mahābalāmalavajraśaṅkarā caiva / vajrakumārī kuladhārī
 vajrahastā ca / mahāvidyā tathā vidyākāñcanamālikā kusumbharatnā
 caiva / vairocanakuloṣṇīśavijṛmbhamānā ca vajrakanakaprabhā
 locanavajratuṇḍī ca / śvetā ca / kamalākṣā śaśiprabhā ityete mudrāga-
 nāḥ sarve rakṣāṃ kurvantu mamāsyā //

Ryōgonsu Mantraḥ

namas tathāgatāyārhate saṃyaksambuddhāya namaḥ sarvabuddha-
 bodhisattvebhyaḥ / namaḥ saptānām saṃyaksambuddhakoṭīnām
 saśrāvakaśaṅghānām / namo loke 'rhatām / namaḥ srotāpannānām /
 namaḥ sakṛdāgāminām / namo loke saṃyaggatānām saṃyakpra-
 tipannānām / namo devaṛṣiṇām / namaḥ siddhividyaḍhararṣiṇām
 śāpānānu grahasamarthānām/ namo brahmaṇe / nama indrāya / namo
 bhagavate rudrāya umāpatisahitāya / namo bhagavate nārāyaṇāya /
 pañcamahāmudrān namaskṛtya namo bhagavate mahākālāya tripura-
 nagaravidrāvaṇakārāya / atimuktikaśmaśānanivāsine / mātṛgaṇām
 namaskṛtya / namo bhagavate tathāgatakulāya / namaḥ padmakulāya
 / namo vajrakulāya / namo maṇikulāya / namo gajakulāya / namo
 bhagavate dṛḍhaśūrasenapraharaṇarājāya / namo bhagavate 'mitā-
 bhāya tathāgatāya 'rhate saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate

akṣobhyāya tathāgatāyārhate saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate
 bhaiṣajyaguruvoidūryaprabhārājāya tathāgatāya (arhte saṃya-
 ksambuddhāya) / namo bhagavate saṅkusumitaśāleन्द्रarājāya
 tathāgatāyārhate saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate śākya-
 munaye tathāgatāyārhate saṃyaksambuddhāya / namo bhagavate
 ratnaketurājāya tathāgatāyārhate saṃyaksambuddhāya /

tebhyo namaskṛtya etadbhagavatī tathāgatoṣṇīśasitātapatrā nāmāpa-
 rājītā pratyaṅgirā sarvabhūtagrahanigrahakarāṇī / paravidyāchedanī /
 akālamṛtyuparitrāyaṅkarī / sarvabandhanamokṣaṇī /
 sarvaduṣṭaduhṣvapnanivāraṇī / caturaśītīnām grahasahasrāṇām
 vidhvaṃsanakarī / aṣṭāvīṃśatīnām nakṣatrāṇām prasādhanakarī /
 aṣṭāṇām mahāgrahāṇām vidhvaṃsanakarī / sarvaśāstranivāraṇī /
 ghoraduṣṭasvapnānām ca nāśanī / aparājitaghorā mahābalachandā
 mahādīptā mahātejā mahāśvetajvālā / mahābalapāṇḍuravāsīnī /
 āryatārā / bhrūktī caiva vijayā / vajramālā viśrutā / padmakā vajrajihvā
 ca / mālā caivāparājītā / vajradanḍī viśālā ca / śāntavidehapūjikā /
 saumyarūpā / mahāśvetā / āryatārā / mahābalāmalavajrasāṅkarā caiva /
 vajrakumārī / kuladhārī / vajrahastā ca vidyākāñcanamālikā /
 kusumbharatnā caiva / vairocanakuloṣṇīśā / vijṛmbhamānā ca
 vajrakanakaprabhā / locanavajratuṅḍī ca śvetā ca kamalākṣā śāśiprabhā
 / ityete mudrāgaṇāḥ sarve rakṣāṃ kuruvantu mamāsyā //

〔悉曇版和訳〕

仏頂白傘蓋陀羅尼

一切の仏・菩薩衆に礼拝す。声聞僧伽と共なる七千万正等覺に
 礼拝す。世の阿羅漢らに礼拝す。預流果(の聖者ら)に礼拝す。一
 來果(の聖者ら)に礼拝す。不還果(の聖者ら)に礼拝す。世に正し
 く来て正しく入れる(聖者ら)に礼拝す。三宝に礼拝す。至尊たる
 堅固で勇敢なる軍兵を碎破する王なる如来・阿羅漢・正等覺に礼
 拝す。至尊たる阿弥陀如来・阿羅漢・正等覺に礼拝す。至尊たる
 阿閼如来・阿羅漢・正等覺に礼拝す。至尊たる薬師瑠璃光如来・

(15)

阿羅漢・正等覺に礼拝す。至尊たる開敷花沙羅樹王如来・阿羅漢・正等覺に礼拝す。世尊たる釈迦牟尼如来・阿羅漢・正等覺に礼拝す。至尊たる宝幢王如来・阿羅漢・正等覺に礼拝す。如来部尊に礼拝す。蓮花部尊に礼拝す。金剛部尊に礼拝す。摩尼部尊に礼拝す。象部尊に礼拝す。神仙らに礼拝す。呪いの繞益の力ある成就の明呪を持する聖仙らに礼拝す(蛇足の前句を省く)。梵天に礼拝す。インドラに礼拝す。ウマー神妃を伴えるルドラ尊に礼拝す。羅刹を伴える那羅延天(ヴィシュヌ)に礼拝す。

五大印に礼拝して、(悪魔の)三市の街を破壊し完全解脱して墓地に住み聖母衆に拝まれるシヴァに祈る。これらに礼拝して、この仏頂白傘蓋と名付くる不敗反呪詛女尊は一切神らに礼拝され、一切神らに祀られ、一切神らに供養されたる者なり。一切鬼靈・邪魔らを滅ぼすものなり。敵の明呪を絶つものなり。悪趣の有情を鎮めるものなり。悪人らを滅ぼすものなり。時ならぬ死を鎮めるものなり。一切繫縛を解き放つものなり。一切悪夢を無くするものなり。八万四千の邪魔を滅ぼすものなり。二十八星宿を成就するものなり。八大邪魔を滅ぼすものなり。一切の敵を滅ぼすものなり。恐ろしい悪夢を無くすものなり。毒・武器・火・水から守るものなり。

不敗の怖畏女尊、大力女尊、大炎女尊、大光輝女尊、大白炎女尊、大力白衣女尊、聖ターラー、かつ洗面女尊、有名な金剛鬘女尊、蓮花女尊、かつ金剛舌女尊、また不敗の華鬘女尊、金剛杖女尊、かつ高貴女尊、寂靜靈に祀られたるもの、大白女尊、聖ターラー、大力女尊、また無垢金剛与樂女尊、金剛童女尊、息女々尊、かつ金剛手女尊、大明呪女尊、同様に明呪金鬘女尊、また花宝女尊、かつ太陽部仏頂開示の女尊、金剛金光女尊、かつ光金剛面女尊、かつ白女尊、蓮眼女尊、月光女尊、以上これらすべての印契眷属がこの私の保護を為されよかし。

[考察]

悉曇版は楞嚴呪より少しく増大している。そして広本は悉曇版より約五割ほど増大している。何より抄本は「オーム」の聖音

(pranavah)を欠く。これはアラム語系統の起源を持ち、キリスト教の「アーメン」と同義である。ウパニシャッドでは「そうだ」という承認の意味があると述べている(木村「OM—承認の辞としての」、『印度學佛教學研究』第25巻1号)。チベット語訳(デルゲ版、東北帝大目録第590)はこの「オーム」を欠き、インド原本にそれが無かったことを意味している。そして中国版陀羅尼と違ってチベット訳は意識が主体である。悉曇版と「大仏頂如来放光悉担多鉢担羅陀羅尼」(大正新脩大藏経第944A)を比較すると、表題を除いてよく合っている。空海が将来したのもこの唐本である。所が宋本は楞嚴呪の方に近くなっている。そして唐本と後者は構成が前後している。これは原本が違っていたと見るべきで、原本は宋本にあったと見られる。それをやや短縮した元本は従って左の様に還元でき、和訳を結論的に最後に添える。原典研究の結果、楞嚴呪の原文と和訳につき、『禪宗の陀羅尼』第1篇第1章第2節を補正した所がある。

〔楞嚴呪和訳〕

如来・阿羅漢・正等覚に礼拝す。(第二句は混乱しており削除。)一切の仏・菩薩に礼拝す。七千万の正等覚に礼拝す。声聞を伴なう僧伽に(礼拝す)。世の阿羅漢らに礼拝す。預流果の者らに礼拝す。一來果の者らに礼拝す。世の正來の者らに礼拝す。正しく向う者らに(礼拝す)。神・聖仙らに礼拝す。成就する明呪を持する聖仙らに礼拝す。繞益の力ある呪いに(礼拝す)。梵天に礼拝す。帝釈天に礼拝す。ウマーパティ神妃と共なるルドラ尊に礼拝す。那羅延天(ヴィシュヌ)に礼拝す。

五大印に礼拝して、(悪魔の)三つの城市を破壊する大黒天に礼拝す。完全解脱して墓地に住む(シヴァ)に礼拝す。聖母衆に祈って、如来部尊に礼拝す。蓮花部(尊)に礼拝す。金剛部尊に礼拝す。宝部(尊)に礼拝す。象部尊に礼拝す。堅固な勇兵碎破王尊に礼拝す。無量光如来・阿羅漢・正等覚尊に礼拝す。阿閼如来・阿羅漢・正等覚尊に礼拝す。薬師瑠璃光王如来・阿羅漢・正等覚尊に

礼拝す。開敷華沙羅樹王如来・阿羅漢・正等覺尊に礼拝す。釈迦牟尼如来・阿羅漢・正等覺尊に礼拝す。宝幢王如来・阿羅漢・正等覺尊に礼拝す。

彼らに祈って、この如来仏頂白傘蓋と名づくる不敗・反呪詛(の陀羅尼)女尊は一切の鬼霊や邪魔を払うものなり。他者の呪文を断ち切るものなり。時ならぬ死から守るものなり。一切の悪しき悪夢を払うものなり。八万四千の邪魔を払うものなり。二十八の星宿を整えるものなり。八大悪星を滅ぼすものなり。一切の敵を滅ぼすものなり。そして恐ろしい悪夢を滅ぼすものなり。毒難・劍難・火難・水難より救うものなり。不敗のゴーラー女尊、大力チャンダー女尊、大火炎女尊、大威力女尊、大白炎女尊、大力なる白衣女尊、聖ターラー女尊、かつまた洪面女尊、勝利女尊、有名な金剛鬘女尊、蓮花座女尊、そして金剛舌女尊、そして不敗の花鬘女尊、金剛杖女尊、そして最勝なる寂靜霊として祀られる女尊、愛形なる女尊、太白女尊、聖ターラー、かつ大力無垢なる金剛吉祥女尊、金剛童女尊、善女々尊、かつ金剛手女尊、明呪金鬘女尊、かつまた黄金宝女尊、太陽部仏頂女尊、かつ開口女尊、稲妻や金の様に光る女尊、光金剛面女尊、また白く蓮の目をした女尊、月光女尊、以上これら印契諸尊一切がこの私の守護を為せ。(「インツノー」は木村前掲書52頁参照)

[考察]

無著道忠は『禅林象器箋』において夢窓国師の『夢中間答』を引き、唐土では大悲呪のみ諷誦してまず坐禅を急務とし、楞嚴呪を諷誦して楞嚴会と為すは近代(宋代)になってからだと述べたとする(唐土禅院毎朝粥後唯誦大悲呪一遍耳。蓋坐禅為急務故。若誦楞嚴呪名為楞嚴会亦是近代始起)。続いて拔隊得勝の『和泥合水』を引き、純禅の系譜に注目する(第十六類・諷唱門)。

因みに法山は4月15日の祝聖から結制に入ることになり、檢疏の後、法堂で結制上堂が9時から行われる。仏殿に移って住持焼香の後、楞嚴行道し、以って楞嚴会と為す。維那子は走り焼香を

したりで、この日は特に忙しいが、これは無著の引く聖一国師の事行主義を想起させる。しかし江湖では次第に楞嚴呪から大悲呪に簡略化される道を辿っており、妙心寺派で言えば特例寺院でも例外ではない。大悲呪が観世音菩薩に向けた祈祷であるのに対し、楞嚴呪は精進の意義を持っている（もとは安寧息災を祈願する陀羅尼であるが、楞嚴呪としては）のである。

維那の導入部の「ノウレンネンウイジョウジホゾ」(南無楞嚴会上諸菩薩)は法山梵唄で特に難しく、他山の梵唄と違って謡曲の発声が入っていると筆者は見ているが、ともかく南宋伝来の発音を保っていることは確かである。黄檗宗では明末の発音になっている。尚、筆者は梵唄については水野泰嶺和尚の鉗鉦を受けた者である。

〔付記〕

「薩婆訶 = svāhā」について、初出の婆羅門教祈祷集『白ヤジュルヴェーダ』(Vājasaneyisamhitā)についての調べを報告する。それに解説を加えたマヒーダラに依ると、「供物なり」の謂で、火神アグニの三兄弟に供えると、神々はそれを資糧とするという。バター油などをくべると燃え上がるので、それを供物と言うのである。祈祷の終わりにこの間投詞(ニパータ)を唱える習慣が仏教に入ったもので、いまひとつの間投詞“vashaṭ”は仏教に入らなかった。代わって悪霊退散の間投詞「phaṭ = 泮」が楞嚴呪に入っている。「喝」の謂である。白石真道師の「弥栄」や、それを承けた中村元博士の「幸あれ」が巷間に流布しているが、信者の幸の為に神々を動かす祈祷であるから、それらは誤訳である。

臨濟宗妙心寺派教學研究紀要 第一号

平成十五年 四月一日 発行

発行人 細川 景一

編集 妙心寺派宗務本所教化センター

印刷所 信天堂

発行所 妙心寺派宗務本所教化センター

〒六一六一八〇三五

京都市右京区花園妙心寺町六十四

電話(〇七五)四六二一三二二一代

ISSN 1348-3455